

カンバーランド長老教会さがみ野教会牧師 宮井岳彦
牧師：10年 説教塾：13年（含む学生説教塾） セミナー参加：7回

ハインツ・ヨアヒム・ヘルトの黙想の読書レポート

「3. 憐れみというメシアの使命」

ヘルトは主イエスが「医者が必要とするのは丈夫な人ではなく病人である」と言われ、ご自分を医者とおっしゃったのはなぜなのか、というところからこのチャプターを始める。「この医師は、その務めのゆえに病んでいる者のところに赴かざるを得ないし、あるいは自分のところに来る病人を断ることも赦されない。（中略）そこで洞察力のある人には誰に対しても明らかになることであるが、イエスのメシアとしての行動は、罪責ある人間の病的状況を正当化するものでもなく、それを確かめるようなことでもない。それとは遙かに遠いことである。むしろそれは現実に癒しを与えることであり、完全に新しい人間、丈夫な人間として、そのいのちを救い、目標に至らせるものなのである。」このセミナーでは、第一の黙想の時から、加藤先生の指摘によりなぜ主イエスがご自分を医者と言われたのか、ということが問題になっていた。なぜそう言われるのか、そう言われたときに何が起こるのか。その疑問への答がヘルトの黙想の中にあった。主イエスがご自分を医者と言われたとき、病人を断ることも赦されない方として、ご自分を紹介されたのである。罪が病気であるならば、現代的な感覚からは「病気は誰にも責められない、病であるならば仕方がない」、という言い訳が出てくるかもしれない。しかし、ヘルト曰く、「罪責ある人間の病的状況を正当化するもの」ではなく、「現実に癒しを与えることであり、完全に新しい人間、丈夫な人間として、そのいのちを救い、目標に至らせるものなのである。」イエスは医者として、我々の罪についての講釈を垂れるようなことはなさらない。「この病人が苦しむのは、その人自身の罪責によるのか、それとも罪責なしに苦しみを担ってしまったのかというようなことは、あえて問題にしない。（中略）つまり患者が罪責ある態度であったり、偽りの生き方をしているということが、集中的にみとってあげてあげていささかでも加減するようなことはないのである。」この医師の動機は「憐れみ」であるとヘルトは指摘する。憐れみ深い医師・イエス。何という恵みに満ちたお姿であろうかと思う。私はここでエレミヤ書第17章9節を思い起こした。「人の心は何にもまして、とらえ難く病んでいる。誰がそれを知り得ようか。」この病が死に至る病であることをご存知なのは、神のみであろう。私はそれをわきまえていない。しかし、そのような患者の態度に拘わらず、医師の憐れみの使命が、私を癒してくださるというのだ。この黙想による討論の中で、現代日本の精神的問題のひとつは自己義認であるという指摘があった。自己義認の病に冒されているのである。このエレミヤ書の御言葉を、改革者ルターは「人の心は突っ張っているか、いじけているか、どちらかだ」と訳したという。この御言葉が語る病の姿が現代社会の姿そのものであるのではないだろうか。そして、大事なことは、ヘルトがこの黙想の中で「イエスの呼びかけ、そしてまた人びとと交わられたことが、敵であろうが、批判者であろうが、友人であろうが、誰に対しても、呼びかけておられるのは、われわれが憐れみ深く

なるようにと願っておられたからである。イエスの、われわれに対する宣教も、その行動も、われわれが恐るべき非人間的なものとなってしまうこと、つまり、憐れみを失うという動機から解放されるということをお願いのことであった。憐れみを失ってしまうこと、それこそ、われわれの自己義認の結果であり、その兄弟のようなものでしかないのである。」と述べているところである。主イエスは聴き手を憐れみへと招いて折られる。ご自分と同じように憐れみ深くなるように、と。憐れみの共同体へ招いておられるのだ。これこそ、今、私たちの社会が真に求めている福音の現実的な姿ではないだろうか。そして、キリストが山上の説教で語られた新しい律法に生きる人間、新しい人間とは、この憐れみを生きる者に他ならない。この憐れみの共同体を形成する説教が、ここで求められているのであろう。